

## 日・韓両国語の伝聞表現のモダリティ：話者の表現 意図を中心に

呉, 先珠

<https://doi.org/10.15017/1654600>

---

出版情報：九州大学, 2015, 博士（比較社会文化）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 吳先珠

論 文 名 : 日・韓両国語の伝聞表現のモダリティ—話者の表現意図を中心に—

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、第1に両国語伝聞表現をカテゴリー化し、話し手の表現意図というモダリティ観点から解明することであり、第2に両国語伝聞表現の意味機能を考察することにある。そのために、日韓両国語の伝聞表現について、現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ:Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese)、韓国国立国語院世宗コーパスを活用すると共に、独自にドラマ・小説などから採集した約5000の用例で論証した。

本論は大きく7つの章で構成されている。

第1章では、まず研究背景を述べ、用語の定義及び表記、研究目的を提示した。さらに先行研究を博搜した上で、ムード、モダリティ、証拠性などの言語学的定義を通観し、その問題点と限界を指摘しつつ、新たに論究すべき研究課題を提示した。

第2章では、日韓両国語のモダリティと伝聞表現に関連する先行研究を通観した。日本語のモダリティは山田(1936)の「陳述論」とそれに対する批判から始まり、韓国語は최현배(1937)における文の分類から開始していることを見据えて、これまでの先行研究においては、ムード形式に対する研究が主流を成し、終結語尾に対する研究は疎かになっている傾向にあると主張した。

第3章では日韓両国語伝聞表現を通時的観点から考察した。元来、「そうだ、ようだ、らしい」は物事の「様態」を表す表現であったが、その後「推量・推論」として転用され、さらに「伝聞」にも拡大していった。この「様態」>「推量」>「伝聞」の意味拡大の順番が、話し手の認識世界における一つの発展プロセスであると指摘した。さらに「という」は「と+いう」、「とか」は「と+か」の語結合にそれぞれ由来するので、「という」においては「と」の持つ並列の意味が前件と後件を対等に結びつけ、「とか」においては「と」の持つ並列の意味と「か」の持つ疑問の意味が衝突することで、「不確か・曖昧」などの意味を帯びるに至ったと指摘した。その一方で、韓国語伝聞表現は引用を起点としており、間接引用が叙述法・疑問法・命令法・勧誘法の四つのうちどれかに属するものの、後期中世韓国語においては直接引用と間接引用を区別し難い。後期中世韓国語引用表現を通観した結果、[引用動詞—[被引用文]]、[引用動詞—[被引用文]—(하·-)]、[[被引用文]—引用動詞]の3パターンに分類できるが、その多くが直接引用と解されると論述した。なお、[引用動詞—[被引用文]]の構成はSVO言語である中国語の影響を受容したためだと推論した。管見の限りでは、後期中世韓国語には引用格助詞‘고(ko)’、‘라고(lako)’が出現せず、その文末には接続語尾‘-고’や先語末語尾‘-니’が文末に用いられる場合も多く、ムード形式‘-더(te)-’、‘-던(ten)-’も現代語ほど多用されていないと報告した。

第4章では、「コミュニケーションの場における話し手の表現意図」の観点から現代日本語における伝聞表現を考察し、①情報共有の確保手段(自己情報か他者情報か)、②情報の入手経路、③情報に対する話し手の心的態度を表す戦略(客観的・不確か・曖昧など)、④情報が聞き手に及ぼす影響(情報判断への介入可能性)に注目することで、伝聞表現のカテゴリー化に努めた。その結果、推論「そ

うだ」>「ようだ」>「とか」>「らしい」>伝聞「そうだ」>「って・という」>「ということだ」>「とのことだ」の順に右に移行するほど、情報判断における話し手の主観性、情報判断への介入が弱化する反面、聞き手の介入余地が高くなり、情報への真偽判断は聞き手に委ねられることが判明した。加えて日本語伝聞表現の意味機能を考察したところ、他の伝聞表現が主に情報伝達の機能を持っているのに比べ、「って」に情報確認と意外性が確認できることから、文末における「って」の機能は終助詞的であることを指摘した。

第5章では、「コミュニケーションの場における話し手の表現意図」の観点から現代韓国語における伝聞表現を考察した。そもそも引用形式に由来し、しかも複雑な縮約・省略過程を経て文法化されているため、伝聞表現の数は少なくとも37に達すると報告した。本論文では、研究史を見据えて、敢えてムードの観点を導入せず、むしろ37の韓国語伝聞表現を1)情報の伝達、2)情報確認、3)情報要求、4)意外性の4点から考察することで、文法範疇と意味範疇に分類した。その上で、各表現の話し手の表現意図を、①情報共有の確保(自己情報か他者情報か)、②情報の入手経路、③情報に対する話し手の心的態度を表す戦略(客観的・不確か・曖昧など)、④情報が聞き手に及ぼす影響(情報判断への介入可能性)に主眼を置いて、韓国語伝聞表現のカテゴリー化に努めた。その結果、「-단다(tanta)>-답니다(tapnita)>-다더라(tatela)>-대(te)>-다며(tamye)>-다면서(tamyense)>-다지(taci)>-다네 >-다나(tana)」の順で右に移行するほど話し手の主観の介入が強くなるため、情報判断が話し手中心である反面、聞き手の介入可能性が低下すると判断した。

第6章では、日韓両国語のモダリティと伝聞表現のモダリティを比較した。まず日本語伝聞表現は推論・引用・助詞から由来し、助動詞、複合助動詞、連体修飾の3形式において出現するが、他方、韓国語伝聞表現の殆んどが引用に由来しているため、複合形式、連体修飾形により出現し、さらに複雑な縮約・省略の過程を論証した。また日本語の認識のモダリティはムードを持たず、「命題めあてのモダリティ」と「発話伝達のモダリティ」の2分類される。それに対して韓国語ではムードがテンスの役割を兼ねているため、ムードとモダリティが対立する上に、接辞が付くことも可能となり、語彙的に現れる場合もあることから「命題めあてのモダリティ」と「発話伝達のモダリティ」の境界を明確にし難いと指摘した。一般に日本語伝聞表現は推論や並列助詞から由来している表現も多いため主観的と考えがちで、韓国語伝聞表現は引用から由来しているため客観的であると考えがちである。しかし、本稿での考察の結果、日本語伝聞表現の中で、推論に由来する表現と助詞に由来する表現は話し手の主観を含みやすいものの、情報源を提示することで情報と距離を置くことができ、引用由来(連体修飾形を含む)の表現は情報との距離を置きたがる話し手のモダリティが表出されているため、総合的に判断すると日本語伝聞表現は客観的特徴がある。他方、韓国語伝聞表現の殆んどが引用に由来しているものの、情報に話し手の主観が介入し、聞き手を話し手側へ誘導しつつ、説得・諒解させる意図を持ちがちであると論証し、主観的特徴があることが確認できた。

第7章では、本論文を総括しながら、少なくとも伝聞表現においては韓国語の方が日本語より膠着語的の性質が強く現れると思われる、モダリティの表出においても積極的で、且つ感情的であることが分かった。両国語伝聞表現におけるこのような相違は、責任を曖昧にする傾向がある日本語表現と、自らの主張の正当性を押し通そうとする傾向がある韓国語表現の特徴が、それぞれの伝聞表現の根底に存在するからだと推察できる。